要 報

夏・冬兩半期の降水量の比*

朝比奈貞一，府中國一

氣候が農業のみならず種々の産業を支配する重要な因子である事は言を俟たない。現在各種の測候機關に於ける觀測資料は、それを基礎として氣候表乃至氣候圖等が作製されてゐるが夫等は觀測値の平均・偏差・又は合計等である。中原孫吉氏が指摘された如く現在の氣象觀測値は應用植物學的見地からしてそのまゝでは不充分であらう（測候時報 8, 409 頁。）併しこれを立場を代へてそれ等に或る工作を施せば或は産業上、より一層有用な資料を提供し得ることゝ思考せられる。

よつて、植物の榮養期間と休眠期間とに觀點を於いて一年を四月より十月までの夏半期と十一月より翌年三月までの冬半期とに分ち、その兩半期に於ける降水

量の比を求めその分布圖を作製して見た。中原孫吉氏は之等の百分率を算出されたが⁽¹⁾それを用ひても本報告と似た圖が描ける。

資料は全國的のものとしては昭和十三年本曆（測候機關の創立より昭和十年まで）昭和十一年氣象年報、地方的のものとしては朝鮮氣象三十年報、昭和五年及び昭和十年の長野縣氣象年報によつた。

煩雜をさけて表は省略するが P_s, P_w を夫々夏半期、冬半期の降水量とし $R = P_s/P_w$ の分布を求めたのである。

R の値は昭和十年までの累年平均に於いては恒春の 16.94 が最大で高田の 0.58 が最小である。 R の値の等しい點を連絡して見ると圖の如く本邦の地形と之とが如何に密接な關係にあるかが分る。本邦の大部分は殆んど 1 より大であつて 1 に等しいのは北陸海岸だけである。

圖の如き結果は長年月に互る平均値を採用した爲に現はれたものであるか、それとも各年の値について類似の型になるかを昭和十一年の値について調べて見た（第 2 圖）。圖は大體累年平均の時と同じであるが脊梁山脈の南東側の奥羽南部から九州地方まで大部分が 3 から 4 になつてゐることが注目される。之は即ち此の地方は夏半期に例年より多雨であつた事を示してゐる。此の年の R の最大値は青島の 15.34 最小値は高田の 0.62 である。

尙夏・冬兩半期の境目を何處におくかといふことは應用植物學的立場より重要なものであるが攝氏十度の等溫線の移動を考慮に入れて累年平均の値を前記と同様に取扱つて見たが影響は甚だ小であつた。次に測候機關の管内氣候について朝鮮と長野縣に於ける觀測値

第 1 圖

* T. Asahina and K. Hutyu: On the Distribution of the Ratio: (Summer Precipitation)/(Winter Precipitation) in Japan.

(1) 本誌. II 輯, 16 (昭和 13 年). p. 115.

第 2 圖

第 3 圖

第 4 圖

第 5 圖

を同様に扱つて見た。朝鮮も脊梁山脈に平行して線が走り北部ソ聯國境近くと東支那海斜面に夏半期には多半期の十倍以上も雨が降る箇所がある。

長野縣の管内は昭和五年と昭和十年の累年平均から R 線を描いて見たが、之は非常に良く類似してゐる。

以上累年平均・年平均の R を計算して圖を描いて見

たが其等は何れも類似の型をとること及び脊梁山脈を境にして R の値が變ることは應用氣象及氣候上面白い事ではないかと考へられる。

終りに臨み資料につき種々御世話になつた田代武四郎氏、國富信一氏、梶間百樹氏に深謝の意を表する。